

東洋医学概論 及び 経絡操法

Royal Touch 整体スクール

院長 奥居 太郎

～ 東洋医学概論 ～

1. 気、血(けつ)、津液(しんえき)

東洋医学では、人体の基本となっているものは「気」「血」「津液」であり、この調和によって生命現象が成り立っているとみなされています。

「血」は脈中の赤色の液状物をさす。いわゆる血液とってよいです。

「気」は「血」の運行を司っているもの、いわばエネルギーとってよいです。気、血の調和が保たれていれば健康な状態で、調和が乱れると病的な状態となります。

「津液」は「津」と「液」のことであり、リンパ、組織液を含めた体内の水分を総称したものです。

2. 陰と陽

気、血の状態を判断するのに「陰と陽」「虚と実」という概念が取り入れられています。臓腑や経絡、さらに病気のおこり方は「陰」と「陽」の二軍に大別されます。

3. 虚と実・補と瀉(しゃ)

気が充実した状態を「実」、気のなえた状態を「虚」という。「実」の体質の人は、太っていて、血色がよくギラギラしていて、首は短くエネルギーである。「虚」の体質の人は、ほっそりとして背が高く、色が白くて、小声で話し、いかにも無気力である。

相手が、虚か実かによって、施術の仕方も変わる。虚タイプの人には「補」という足りないものを補う方法を、実タイプの人には「瀉」という多いものを捨てる方法を行う。経絡の施術の原則は「補虚瀉実」である。

4. 六臓六腑

よく五臓六腑というが、臓腑とは東洋医学的表現で、内臓諸器官を総称したものである。

「臓」とは実質器官のことで、中に何かが入っているもののことをいう。心、肝、肺、脾、腎にくわえ、心包(しんぼう: 心膜だといわれる)をいれて六臓とする。

「腑」とは中腔器官のことで、胆、小腸、大腸、膀胱、胃、三焦(さんしょう)の六つをいう。

東洋医学では、これら臓腑とよばれるものの実体はつかみにくく、各名称は現代医学でいう器官とは必ずしも一致しない。

5. 経絡の種類

経絡は、いわば身体の気血の流れる道である。12 経絡と、前面正中線の任脈(にんみやく)、後面正中線の督脈(とくみやく)を加えて十四経という。

経絡は、手足の先端を起始ないし停止とするため、手あるいは足の何経という。また、臓は陰となり、太陰・小陰・厥陰(けついん)の三陰に、腑は陽となり、太陽・小陽・陽明の三陽に分けられる。各名称は次のとおりである。

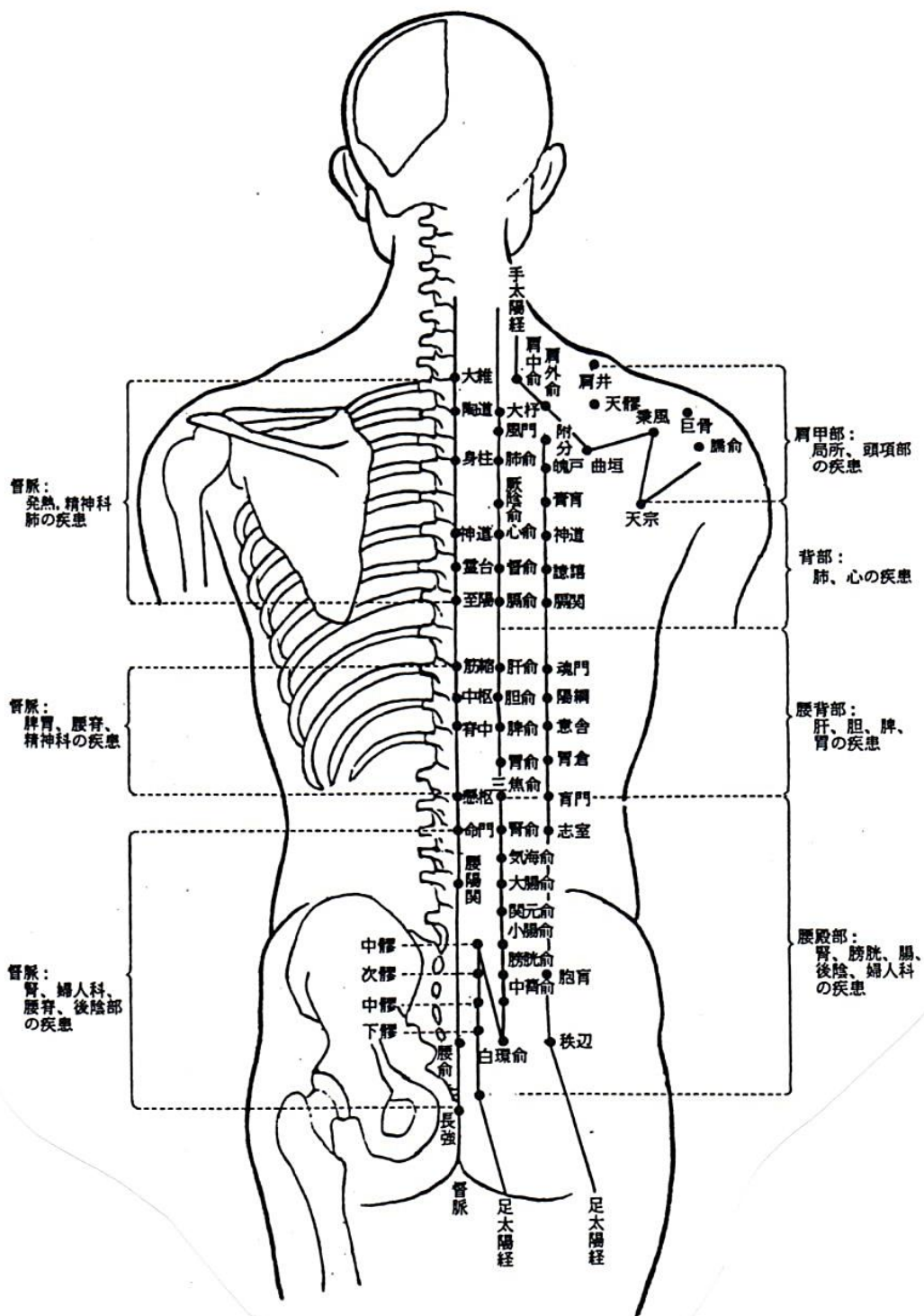
- ◆手の太陰肺経 ◆手の厥陰心包経 ◆手の小陰心経
- ◆手の太陽小腸経 ◆手の小陽三焦経 ◆手の陽明大腸経
- ◆足の太陰脾経 ◆足の厥陰肝経 ◆足の小陰腎経
- ◆足の太陽膀胱経 ◆足の小陽胆経 ◆足の陽明胃経

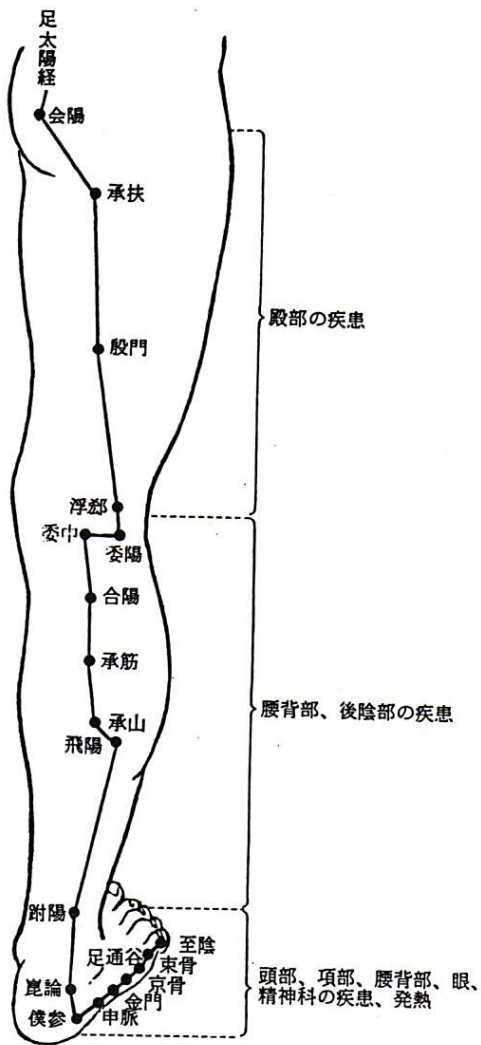
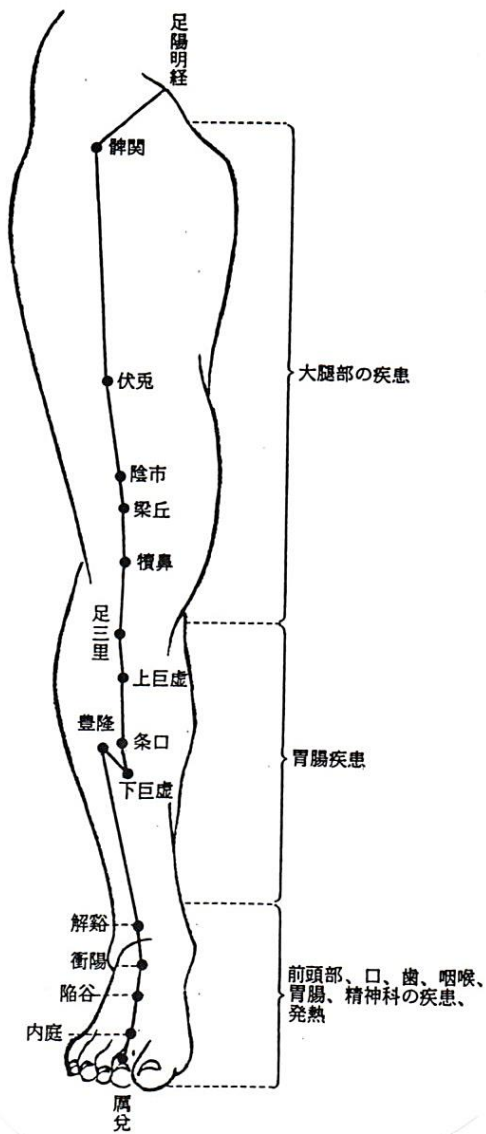
経絡の流れは、直立して上肢を挙上した状態で、陰経は下から上へ、陽経は上から下へ流れる。すなわち「陰経は上がり、陽経は下がる」となる。

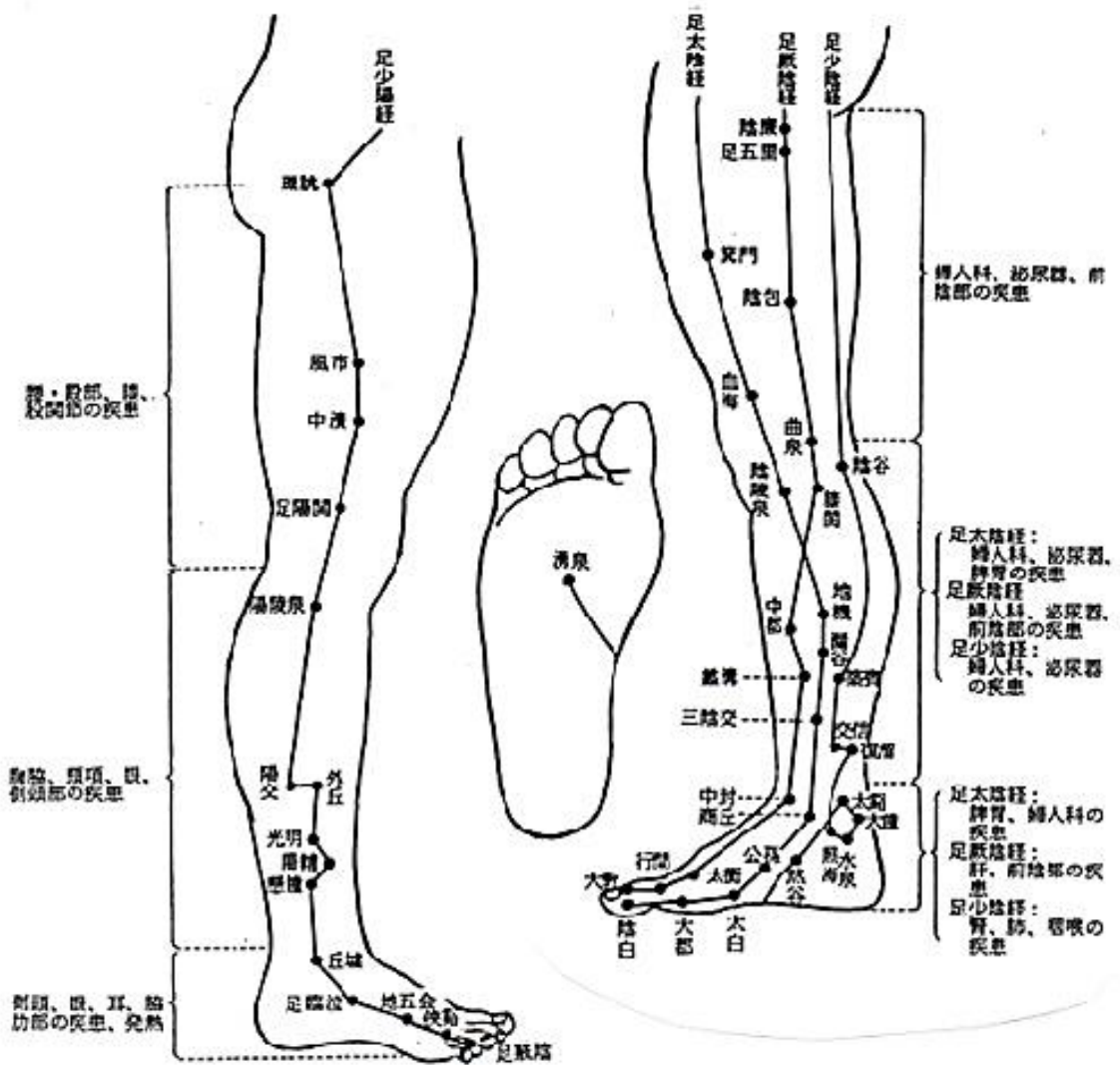
たとえば胃が衰えている(虚している)なら、胃経を上から下へ虚を補い、胃が亢進している(実している)なら、胃経を下から上へ実を瀉する施術を行う。

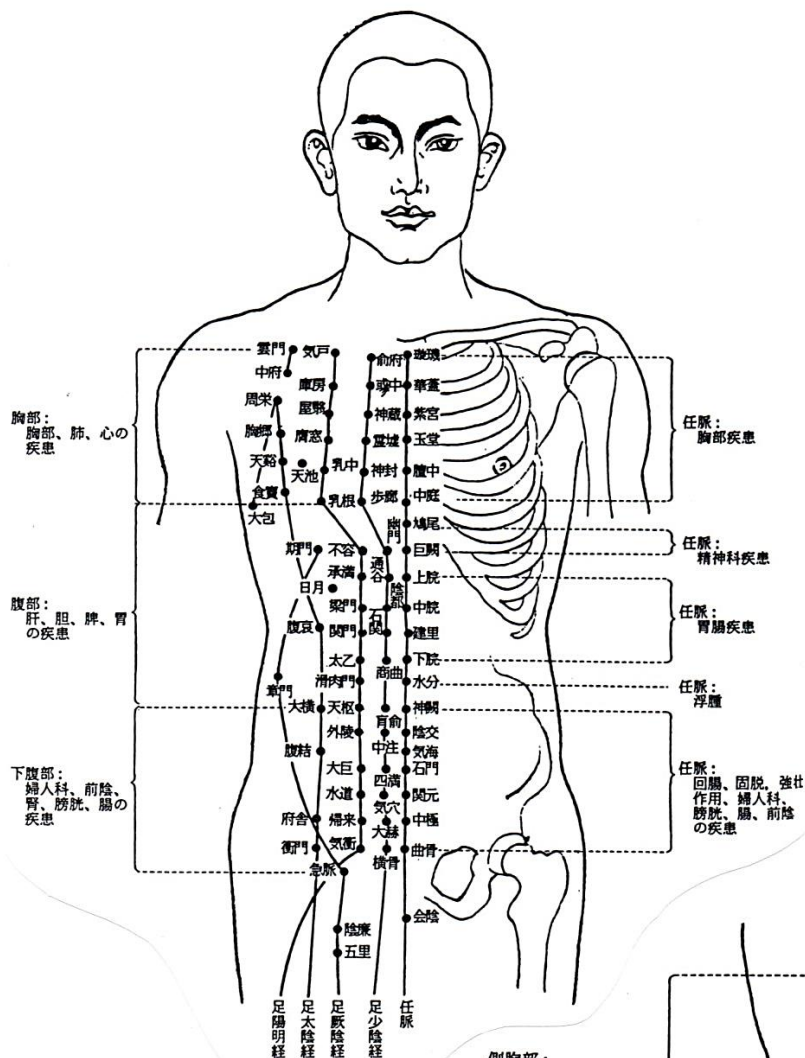
6. 経絡とツボ

経絡の上にはツボ(経穴)が点在している。ツボは身体の反応の出やすいところにあることが多く、ツボを取りながら経絡をたどると効果的である。









側胸部: 肝、胆、局所の疾患

側腹部: 脾胃、婦人科の疾患

